

第12回 年次大会の報告

ワークショップ
分科会発表報告書
2019年度総会報告

『コミ福から新たな時代の「働く／生きる」を考える —私達のキャリアとライフサイクル—』

1) はじめに

前々回および前回の研究大会では、コミュニティ福祉学部20周年に関わるシンポジウムとして、第一に、学部・学科創設に関わった先生方に学部・学科創設時のコミ福に対する思いを語っていただき、第二に、コミ福で学んだ卒業生にコミ福の学びを振り返っていただき、コミ福で学ぶということはどういうことかを体験的にお話をいただきました。

これらの内容がコミュニティ福祉学部の狙いや期待、その学びの意味を理解することができることも充実したものになりました。そのため、この後の企画内容はどうするかというのはかなりハードルが高いものでした。また、方法として学生や卒業生等が主体的に参加することができるワークショップをしてみようという意見が以前からあったのですが、こうしたワークショップに進んで参加してくれる学生や卒業生がどれくらいいるのか、また、混乱せずにコーディネートやファシリテートができるのか不安がありました。しかし、ここは一度やってみる価値はあるだろうということでワークショップをしようということになりました。

一方、テーマについては、在学生も卒業生も共通する話題だということで、学部での学びと卒業後の仕事と生き方をテーマにしました。卒業生は、卒業後の人生（職場・家庭その他）において、学部での学びをどのように活かしているのか。福祉やコミュニティとは一見無関係に見える職場や生活で、学部の学びはどう活かされているのだろうか。このような問題関心から、学部生に比較的近い年齢の卒業生と相互対話形式のワークショップを行い、在学生、卒業生、教員がコミ福での学びとその後のキャリアを共に考える機会としました。

(2019年度副事務局長：木下 武徳)

2) 各会場の様子

〈N224教室〉

【講師紹介】

大木 彩 氏 (NPO法人早川エコファーム)

2015年、コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科卒業。2014年には休学して1年間、カナダのワーキングホリデーに参加。イエローナイフにある

オーロラビレッジにて、オーロラガイドとして8ヶ月勤務。2015年、株式会社コーソル入社、オラクルデータベースサポート業務を担当。2016年、株式会社生態計画研究所研修生として採用。遊休農地活性化を目的とした畑作りに取り組む。2017年、NPO法人早川エコファーム新設。上記事業内容を引き継ぐ。2018年、NPO法人早川エコファームに所属（地域おこし協力隊として採用、NPOに派遣＝仕事の内容は変わっていない）。直売所の運営、会員情報管理、伝統文化復活プロジェクト等を担当。

坂田 拓朗 氏（株式会社クレディセゾン）

2002年、コミュニティ福祉学部コミュニティ福祉学科卒業。コミュニティ福祉学部1期生。2002年、株式会社クレディセゾンに入社。ネット商品販促担当等に従事。現在はリース部門にて自動審査システムの開発・保守を担当。本業のかたわら、キャラクター開発等を行っている。まなびあい運営委員。

【司会】

鍛冶 智子（卒業生／まなびあい運営委員）

【講師の話】

鍛冶 はじめさせていただきたいと思います。まず、大木さん、いかがですか。コミ福で学んで卒業して現在に至るまで。

大木 社会に出て、まだ、5年目なんですけれども。在学中も1年休学してワーキングホリデーという制度を使って、カナダの方に滞在しながら働くという経験もしたので、職歴はちょっと順番はいろいろなるんですけど、そのワーキングホリデーで行ったカナダではオーロラが見えるイエローナイフという極北の地でオーロラのガイドをしました。そのときは日本人の方が9割ほどお客さんだったので、日本語でのガイドをしながら、日本とはまた違うという点でもそうですし、カナダの中でも隔離じゃないですけど、人が少ないという環境の中でガイドという仕事をしました。

その後、大学に戻ってきて学部で卒業したので、同期とは1年遅れで社会人をスタートして、そのときはIT企業のカスタマーサポートの仕事をしました。その後、アウトドアショップの店員を経て、今、NPO職員として、山梨県の中の、早川町という静岡よりの所で農業兼直売所の運営をしています。

キャリアとしては授賞式でも少しお話をさせてもらったんですけども、出身

も東京の墨田区で、カナダへ行くまでは家を出たことがないということで、都会しか生活も仕事も知らなかったんですけども、キャンプの授業、このスポーツウエルネス学科でやっていたキャンプの授業をきっかけに自然環境方面に関心を持つようになりました。

そのときのギャップですごく大きかったのが、健康の捉え方で、それまでもずっと考えていたのが、人はどうやったら元気で居続けられるのかっていうのをテーマに食事だったり、サプリメントだったり栄養学というもの、あとは運動方法学などなどスポーツウエルネス学科で学ばせてもらいました。実際に学中にスポーツジムでアルバイトしたこともありました。

こうやっていろいろな方法を試していけば健康というものは確立されていくだろうと思っていたんですけども、キャンプの授業をきっかけにその手前、要は内省する時間のようなものを経て、人の思考と違う部分、感情だったり内側から出てくるものというものに目を向けるきっかけになりました。それはなんでかという、人だけじゃない植物だったり動物だったりというものに囲まれたときに、後から足していったスキル以外のもの自分がもともと持っているものに向き合う時間があったからなんですね。

今現代人に欠けているといわれる自分で考える力だったりとか、自己肯定感のようなものに注目するようになりました。そうやって方向をシフトしていったと

きに、じゃあ自然の中で学べるもの、もっと学びたい、もっと近づきたい、っていう思いから、じゃあ都会を出てみよう、出てみて、騒がれている環境問題だったり異常気象だったりっていうのが本当なのか、人が影響与えてるんだから、人が守らなきゃいけないっていう風潮が本当なのかどうかっていうのを自分で確かめてみようと思いました。

今、何をやっているかという、早川エコファームという団体で早川町の地域作りと環境作りを両方やってます。日本で一番人口が少ない町っていうのがよく特徴で挙げられる町です。森林率が96パーセント。人が住めるエリアは1パーセント以下。なので、人よりもシカが多いといわれています。実際、夜、車運転していてもシカに遭遇することがあるんですが。それだけ自然が豊かなところでも手付かずの自然というのはやっぱり荒れている状態になってしまうんですね。よく問題にされる外来種がはびこる畑だらけというものが高齢過疎化に伴って増えてしまっているというのが町全体で抱えている課題になっています。

このままではユネスコエコパークという世界で認められた自然が豊かな場所で

すら荒れていってしまうっていうので、じゃあ、人が手をいれることで畑にして、農業体験というプログラムを売って、都会の人にも来てもらう。一緒に作った畑で取れたものを地域の方にもお土産で渡したりとか、逆に地域の方が作ったものは持ってきてもらって販売をしよう。というふうにいろんな生き物、人が手を入れていろんな生き物

が増える多様な環境作りと同時にいろんな人が関われる場所ということで地域の活性化をしていこうという団体です。

そこにコミ福の気付き、学び、がどう生きてるかっていうのが、もともと人だらけの中で過ごしてきた自分なんですけども、自然の中に囲まれる環境に身を移したときに何が違ったかという、大して差はなかった。結局は人同士でもどうやったらお互い無理なく付き合えるかなとか、どうやったら楽しいかなとかという付き合い方を考えると思うんですよね。それを自然を対象にして今足りない知識はおばあちゃんたちに聞きながら、で、自然に関して専門家にも知識を補ってもらいながら、でも、基本的なスタンスはコミ福で学んだ『一緒に生きていく』っていう共生です。そこは本当に卒業してからの学びだったんですけども、いざというとき人生の節目節目で、どういう選択を自分がするんだろうっていう指針をここで学ばせてもらったのと、今すごく振り返って思っています。

なので、今後自分だけではもちろんできないことはたくさんあるんですけども、対象が違っててもどうやったらお互いを生かし合えるかというのを考えるスタンスは今後変えずに研究を実践の中で続けていきたいなと思っていますところ。はい。補足の部分は後ほど質問を受け付けられたらと思います。私の話は以上です。

鍛治 はい、ありがとうございます。大木さんはスポーツウエルネス学科卒業というところで、そこから経験した、スポウエルならではの授業、キャンプとか栄養や運動などというところが今につながっているということで、総会に出た方はご存じかもしれないです、『まなびあい』に投稿していただいて、研究実践奨励賞をとられておりましたので、そのあたりまた、これからこのあとのところでぜひまた、いろいろ聞きたいことがあれば聞いてもらえればと思います。では、坂田さんは、どうでしょう。

坂田 はい。私、学生時代はどりのむ・ぼっくすというパフォーマンスサークル



におりました。学生のときは、何も考えてなかったんです。今も考えてなかったんですけど、さらに考えてなくて。ひとまず、民間に就職しようかなと思ったんですけど、実は私、就職氷河期の時代でして、クレディセゾンという会社に2002年に入った。

クレディセゾンというのはどういう会社かっていうと、クレジットカード会社になります。若干面白い会社でして、社内アイドルの東池袋52というアイドル作ったり、あと何かコーポレートベンチャーキャピタルCVCを作ったりしている会社です。私は2002年に入社してずっと今同じ会社で動めています。

カードの営業だったりいろいろやってまして、転勤も2回ほどしてまして、最初は名古屋の方に転勤してたんですけど、万博が始まる前に、東京の方に戻ってきて、2010年に東北に転勤になりまして、仙台でずっと、カードの法人営業ですとかそういうものをやってたんですけど、たまたま東北大震災が2011年3月にありまして、そのとき私も被災をしました。このプロフィールにも格好よく書いてあったんですけど、今、うちの会社、銀行業務以外は何でもやってるんで、リースという金融商品があるんで、そこで与信管理とか、あと自動審査システムの保守なんか開発とかを担当しております。東北大震災とかでも被災してるんで、割と悲惨な目とまではいかないんですけど、そこそこちょっと厳しいのを経験しております。

本業の傍らキャラクター開発などを行っているって書いてるんですけど、ちょっと若干ねたがなくて書いてしまったということもあるんですけど、私、被災をしてから東京に戻って以降、ずっと同じ会社には、いたんですが、このままでいいのかなと思っていて、2013年から佐々木常夫さんというワークライフバランスの、知ってる人は知っていると思うんですけど、東レの役員を務めた方がいらっしゃるんですけど、その方が塾長を務める塾があったんですよ。たまたまそれを知ったんで、そこに入ったときに知り合った人からあるコミュニティ紹介されてまして、それが企業体験をするみたいな、スタートアップウィークエンド東京っていうのがあるんですけど、そういうコミュニティを知ってから私はいろいろなハッカソンとか、そういうのに行くようになりました。そういうコミュニティに行って、一つの会社には、いたんですけども異なるコミュニティに行くようになりまして、たまにコンテストとかも出してたんですけど、表彰とかまではいかなかったんですけど。

して、それでそこから実家が埼玉なんで埼玉の方に戻ってきて、ずっと今池袋に本社があるんですけど、そこで働いています。

皆さん、異能vationって、ご存じですかね。総務省認定の変な人を決めるとい

う、そういう政府のプログラムがありまして、落合陽一さんとかって、ご存じですかね。分からないですか。知ってます？ 知ってます。そういう人が国家認定の変な人とかって、選ばれたりしてるんですけども、そういうプログラムがありまして、今、破壊者部門とジェネレーションアワード部門というのがあるんですけど、今年私がジェネレーションアワード部門の方にノミネートされまして、1万3,000件ぐらいあったんですけど、その中から185件、『共感力、共感覚を活用して食育から職育まで育成するAR事業』というのに選ばれて、プロダクトはないんで、何とか頑張って作ってリリースしていくんですけども、そういうことをほそそとやっております。

コミ福にいて学んだことというのなんですけども、仕事とかだと私、仕事とかだと失敗するとかかなり致命傷を負うというか、すごいダメージがあると思うんですけども、今回いろんなコミュニティとか、こういうなんかコンテストとか行って失敗しても仕事以外のコミュニティでいろいろ参加することによって、どんどん失敗することで自分の力が高められたりしますし、私、プロボノというプロのボランティアの団体がありまして、そこも全く何か全然知識もないまま入ってしまったら、総すかんを食らって本当に激しい思いをしたんですけど、何とかあったんで、いろんなコミュニティで、全く未知の分野、仕事以外のところでボランティアじゃないですけどそういうことをやったりすると、やって成功した方がいいんですけどね、失敗するといろいろ経験になるんで、そういう感じがいろいろ身に付いてくるとは思いますんで、よろしいかと思います。そんな感じですか。

鍛治 はい、じゃあ…。

【ワークショップ報告】

学生、卒業生、計8人が入り混じってそれぞれの立場から「コミ福とは何か」を話し合いました。気楽な中にも、お互いの意見をリスペクトし、受け入れようとする姿勢で、活発それでいて楽しく打ち解けた雰囲気の中で、議論、交流、それともサロンなのか、様々な要素が交じり合う中で、進められました。

「どうしてコミ福にはいったの？」

「今、興味をもって取り組んでいることは何？」

「福祉を学びたかったからかな。」

「そう聞かれるとはっきりとした答えが見つからないなあ。」

「やっぱりここで学んだことが今の仕事にしっかり役立っている。」

「キャンパスから地域に出て、いろいろ体験したことが現在の自分の原点かな。」

「私たちの頃も多様性があって、積極的に社会活動に参加しているよね、それって絶対、社会で出てから役に立つと思うよ」

「研究と多様な体験との関連性がとっても強かった。」など、現在と過去の思い出が奇妙に絡みあいながら、時間の経過の中に織り込まれていく。結論にならない結論に何となく到達しようと、それぞれの思いを付箋紙に書きとめ、模造紙に張り付けていく。そこからコミ福の実像がぼんやりとやがてくっきりと浮かび上がってくるように思えた。

「アットホームな空気でみんな優しい、池袋にはない良さが新座にはある。コミ福の強みはそこにある、でもビジネス力、競争力に弱みが…。」

今と過去、時間の違いはあっても「コミ福」という空間で学び研究したという共通点を共有しながら、それぞれが明日への展望を見出せたのではないのでしょうか。

(卒業生／まなびあい運営委員 竹内 悟)

【参加者の声】

- ・先輩方から、コミ福の学びが社会に出てどう役立っているのかお聞きすることができ、大学生活の指針になりました。
- ・今回、初めてまなびあいに参加し、コミュニティ福祉学部の本質について学ぶことができました。1期生～現在にいたるまでの幅広い年齢の方々や多様なバックグラウンドを持つ方々と共に多様な内容について意見を交換し、学ぶことができました。
- ・コミ福の良いところと弱みをポストイットに書き出したときに、皆感じることは大体同じこともわかり、これから自分がどう学んでいくか考えるきっかけになりました。
- ・ざっくばらんに話ができ、久しぶりにコミ福の学生気分に戻ったようでした。コミ福がどんなところなのかを改めて考える機会がありましたが、昔も今もアットホームな雰囲気が多様な学びができる学部なのだと確認できて嬉しかったです。
- ・学生、卒業生が対等な立場でお互いの意見を交換できたことがとっても有意義でした。
- ・参加されている学生の方がすでにインターンを経験されていたり、将来に向けての勉強をされてい

たりなど意識が高く、勉強になりました。

- ・変わらないコミ福、変わっていくコミ福をそれぞれの方が話すことなどから伺い、できればこのようなつながりが継続していくことで世代を超え、学科を超えての広がりが出てくるのかと思います。
- ・まったく異なる経歴の人たちが集まったはずなのに、各々にじみでる熱意に共感できておもしろかったです。

〈N225教室〉

【講師紹介】

榎府 憲太氏（ふじみ野市役所）

2005年、コミュニティ福祉学部コミュニティ福祉学科卒業。サークルはIVYFesta実行委員会に所属。卒業後に専門学校で手話通訳を学び、介護老人保健施設や、ろうあ児施設等を経て、2010年からふじみ野市役所所属。入職当初から福祉課で生活保護ケースワーカーを8年経験し、2018年から障がい福祉課に異動、2020年から再び福祉課へ異動。

松井 あや氏（アサヒビール株式会社）

2015年、コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科卒業。2015年、アサヒビール株式会社に入社。2015年9月～2018年9月、アサヒビール株式会社仙台支社所属。2018年9月～現在、アサヒビール株式会社東京統括支社中央支店所属。入社以来、業務用営業を担当。

【司会】

長倉 真寿美（福祉学科教授）

【講師の話】

長倉 それでは、時間になりましたので始めさせていただきます。本日、司会を務めさせていただきます、福祉学科の長倉と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

長倉 本日こちらのワークショップでは、ふじみ野市の榎府さんとアサヒビール株式会社の松井さんに、卒業生としておいでいただきました。順番としては、まず、最初に松井さんは御用があって、4時半にご退出されるので、まず松井さんにお話をいただいた後に、榎府さんにお話をいただきます。それで、伺ったお話をもとに、こういうまなびあいと

いう機会もございますが、今後コミ福がどういうふうになっていったらいいのかを話し合いたいと思います。まなびあいに来る人そして、こういうことが行われていることを全く知らずにいる人等、いろいろおります。もっと在学生、卒業生、教職員全てがコミ福をどう盛り上げていくか、どうしていきたいかといったことをお二人の話をヒントに一緒に考えていけたらというのが趣旨でございます。それでは早速、松井さんから大学のお話を少ししていただいて、今のお仕事の話、これからの展望について、個人のお話で結構ですので、どうぞよろしくお願いいたします。

松井 きょうはよろしくお願いいたします。私自身すごく今日来るのを楽しみにしていました。私、今、営業職でして、得意先のお通夜が入ってしまったので、4時半に抜けさせて頂きます。私は2015年度コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科卒の卒業生です。大学4年間はいろんなことをやっていたのですが、特に体育会のスキー部で活動していたのが一番濃いエピソードかなというふうには思ってます。一方で、勉強も自分なりに頑張っていて、体育の教員免許を取得する勉強していたりとか、あとは、大石先生のゼミに入ってスポーツ心理学の勉強をしたりしていました。座キャンに4年間いたのですが、教員免許取るに当たって池袋キャンパスと行き来して、部活動も池袋であったりとかしたので、結構毎日充実した日々を過ごしていたかなというふうに思います。

今の仕事に就いてからのことになりますが、現在は、アサヒビール株式会社東京中央支店というところで営業をしています。最初の3年間は仙台にいました。地元は東京なのですが、総合職、全国転勤ありの採用ですので、最初、仙台で3年間、今と同じ営業、去年の9月に東京に転勤になりまして、今、東京中央支店というところでやっています。具体的に何の仕事をしているのかというと、2パターンあって、業務用営業と量販営業があります。聞いたことがありますか？

参加学生 想像はつく。



松井 想像はつく。

参加学生 飲食店向けと、普通のスーパーに卸す缶とかのやつですか。

松井 まさに、その通りです。私は今言ってくれた前者の方ですね。業務用営業と言って、皆さんがよく行く居酒屋さんとかレス

トランとかバーとかのお酒を、アサヒビールの売り上げが上がるように営業したりとか、その飲食店さんにお酒を納めているお酒屋さん向けの営業です。街の酒屋さんって見たことあるかどうか分からないのですが、大きい酒屋さんもあれば小さい酒屋さんもあり、両方一緒に担当しています。もう一つの営業は量販営業と言って缶ビール、

いなげやさんとかに、いっぱい缶ビールあると思うんですけど、そこの売り上げが上がるように工夫するというような営業があります。でも、私の方は業務用営業の方をずっと、もう5年間やっています。

今後の展望ということですが、コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科って名前が長いし、結構いろいろあって、何を学んだかなっていうと、本当にこれってというのは言い切れない部分もあります。まずは、コミュニティ福祉の福祉の部分に、入りたいなと思ったきっかけは、私、3兄弟なんですけど、真ん中のお兄ちゃんが知的障害を持っていて、ダウン症という病気なんですけど。そのお兄ちゃんのこともっと知りたいなとか、お兄ちゃんの生活がもっと豊かになるにはどうしたらいいのかなとかも知りたかったので。そういうのがもしかしたら学べるのかなって、ちょっと漠然とした希望をもってコミュニティ福祉に興味を持ったのと、あとスポーツ、私はずっとスキーをやってきたので、スキーを一生懸命大学でもできそうな学科だなというところで、コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科というところにすごく興味を持って、4年間すごく充実したなと思います。今後の展望ってすごく難しくて、学びが今にどう生かされているかって言い切れないんですけど。一つは、すごくいろんなことを、福祉のこともそうだし、あとは、多文化とか、いろんな文化のことも学ぶことができたし。これがこれにつながっていると整理するのはなかなか難しいけれども、視野はすごく広げることができたかなというふうに思っていて、素晴らしい先輩方と、あと、先生達に出会えたり、今でもずっと仲いい友達、8人グループがあるんですけど、その人たちもすごく仲がいいし。いろんな人たちに会って、いろんな先生に出会って、視野を広げることができた4年間だったなというふうに思いますし、これまで一つの会社に所属していますが、その会社の中でも学び、いろんな人たちがいる環境の中でいろいろ吸収していきたいという思いもあるので、そういうのはこの大学学部学科に入って本当によかったなと感じているところです。会社に所属する者としてずっと営業をやりたいという希望があるわけではなくて、例えば人事とか、人に何か伝えとか教えるというのが結構好きな性格なので、そう



いう業務にも携わってみたいし、アサヒビールをもっと若者に知ってもらえるように宣伝部に行ってみたいとか、いろんな希望があります。今後の会社の中での展望はそのような感じです。すいません。ちょっと長くしゃべり過ぎましたけど。

長倉 長くないですよ。

松井 大丈夫ですか。

長倉 あと、ごめんなさい。もうお帰りになるので、もう一つ。卒業されて、外から立教大学コミュニティ福祉学部を見たときにどんなことを思われているのかとていうのをちょっとお聞きしてみたいです。

松井 どんなことを思うか。卒業してから。いいところもあれば、ちょっとその、課題っていうところでは。

長倉 ぜひぜひ、課題を。

松井 いいところは、いろいろ自由に自分たちでやりたいことが学べることです。例えば、私、他の学部学科は分からないんですけど。経済学部とか法学部とか所属すると、勉強が結構、一本に絞られるかなっていうのは卒業しても結構思っていて。後輩がどんどん会社に入って来ますけど、「何学部だったの」「何の勉強してたの」と聞くと、結構一本の勉強をしてきた人が多いなと思うんですけど、コミ福は本当にいろんな勉強できたな思っていて、言語の勉強もいろいろなカリキュラムあったし、あとインターンシップとかも充実してたとか、福祉のこともちろん知れましたし。すごく、視野を広げるいいチャンスがある学部かなっていうふうには思います。

もう1つ、なんかこれ、すごくおこがましいんですけど。課題だと思うのは、視野を広げるいろんな勉強ができるという一方で、「これをやりきった」「これを勉強しきった」というのが人それぞれではあると思うんですけど、ちょっと見えづらいところは正直あるのかな。あとは、本当にモチベーションが皆さんみたいに高い人ばかりじゃないと思いますし、なんかそこは、これをやろうとか、明確な目標がないとちょっとぶれやすいかなっていうのは私が感じたところではあるかもしれないですね。

長倉 はい。ありがとうございます。それでは榎府さん、お願いします。

榑府 はい。榑府です。よろしくお願いします。

参加学生 お願いします。

榑府 僕は卒業したのが2005年の3月なので、もう15年近く卒業してたっているんです。当時、多分5号館までしかなかったのかな。今もう8号館とかもありますよね。そんなの全然なかったんで、もう雲泥の差だなと思っていて。パスも通ってなかったんで、みんな歩いて通っていたんですけど。まず、なんでコミ福に入ったかっていうと、そんなに明確な理由は、実はなくて。僕高校が隣の立教高校だったんですけど、立教高校3年間の成績順に順位がつけられて、好きな学部を選んでいけるんですけど。なんか僕、行きたい学部が全部先に取られちゃってて。コミ福と…。

長倉 榑府さん、ちなみに福祉学科ですよ。

榑府 僕、1学部1学科時代なんです。

松井 へえ。

榑府 そうなんです。僕、入ったときに。そこの寺脇君もそうです。

長倉 さっき、そういえば、その話してましたね。

榑府 そうです。コミュニティ福祉学部コミュニティ福祉学科だったんです。

長倉 そのときに三本松先生のご指導を受けたっておっしゃってたんですね。

榑府 教えていただいて。だから、三本松先生もいらっしゃったし。僕、卒論は、今、政策にいらっしゃる河東先生です。あと学科の中に沼澤先生とか濁川先生とかもいらっしゃって。みんないらっしゃいました。

長倉 今お名前が挙がった先生方がみんな一緒にいた時代の話ですね。

榑府 本当にそうですね。

長倉 なるほど。そこが在学生には分かりづらいんですよ。

榎府 そうなのですね。

長倉 今は3学科ですからね。

榎府 はい。僕も、だから、「福祉ですか、政策ですか」とか言われると、ぼかんとてしてしまうんですけど。

長倉 なるほど。

榎府 前は1学科だったんですよ。

長倉 そうか、そうですね。卒後15年経つとそうなんですね。

榎府 そうなんです。僕は2年生のときに、もうとっくにいらっしゃらないんですけど、関正勝先生って初代の学部長の先生がいらっしゃって、その方のゼミに入ったらすごく面白くて。なんかそこでフィールドというか、福祉に目覚めたなという感じがしています。そうそう。さっきの、結局コミ福はあんまり選ぶところがなくて、池袋キャンパスと新座キャンパスで分かれるので、僕当時、家が、みずほ台だったので、近い方がいいなと思ってコミ福を選んだっていただけなんです。でも、2年のゼミのときにその関先生とのすごい面白い出会いがあって。キリスト教とか生命倫理のこととかを研究してらっしゃる先生で、ホスピスに連れてってもらったりとかして、すごく良い学びをしたのでちょっとこういう分野でやっていきたいなと思ってたんですよ。3年生のときは実習があって、実習で児童養護施設と児童相談所の、2カ所に行ったんですけど。そこで漠然と子どもの支援、すごくいいなあと考えていて。生命倫理とか、そういったことも考えつつも、実際の仕事としてはそういうふうに考えました。児童相談所だったら埼玉だと県の職員になるので、それもいいかなと思ってたところ、4年生のときに、学生ボランティアセンターみたいな所があってそこに所属しました。そこに耳の聞こえない子がいて、その子から「授業が全然分からないから、なんかサポートしてくれないか」って言われて。今はもう普通にありと思うんですけど、ノートテイクとかをやり始めて。今度はそっちの聴覚障害とかの方に一気にどっぷりつかってしまっ。卒業はしたんですけど、普通の就職をしてなくて。僕、そのまま専門学校に行って手話通訳を2年間勉強しました。その間は地元の障害者センターとかでバイトしながら生活していたんですけど。手話通訳を2年間勉強して、

ただ、手話通訳だと食べていけないので、その後は、最初老人保健施設に就職したんですけど、あまり長く続かなくて。半年ぐらいで辞めちゃって。そのあとも結構転々として、塾の先生やったりとか、市役所の非常勤やってみたりとか。28になる年に、たまたまふじみ野市の求人を見て、受けてみようかなと思って、駄目元で応募したら受かったちゃったので。そこから生活保護のケースワーカーをまず8年やって、去年の4月に移動して、今、障害福祉課で2年目になってます。ちょうど市役所に入って10年目になってます。

今の仕事の内容は、難しいので多分あまり分からないかなと思うんですけど。更生医療とか育成医療とか、高額な医療の医療費の負担軽減をする制度があるんですけど、その申請を受け付けたりとか、決定通知を出したりとか。あと、当然その新規の相談とか、「手帳を取りたいんですけど」とか、「どこどこでこういう人が暴れてます」とか、そういったので駆けつけたりとかもしますし。本当にいろんなことをやっています。手帳の交付とかもやっているので、手帳ができた方にお渡しするとかっていうのもやっています。今現在の仕事はそんな感じです。あとは仕事の今後の展望ですかね。

長倉 そうですね。

榎府 仕事としては、僕、福祉職で入ったので、多分、福祉系の部署以外は行かないと思います。それでも 次の4月、どこに行くか分からないんですよ。今の場所に留まるかもしれないし、違う部署に行くかもしれません。市役所は、すごい異動の内示が遅いので、4月1日からの部署の発表が3月20日ぐらいにあります。異動になったら10日ぐらいで荷物まとめて異動しないといけないんですけど。今後どこの部署に行くか分からないんですけど、多分、福祉系の部署には行くと思うので、そこで多角的な視点を養っていききたいと思うし、僕は生活保護のケースワーカーが長かったので、できればいろんな部署を渡り歩いてもう一回、生活保護のところに戻ってみたいと思っています。生活保護とか生存権とか、そういったところはすごく社会福祉のベーシックな部分だと思うので、もう一度そこに行けたらいいなと思って。その前にいろんな部署を渡り歩こうかなと思ってます。

あと、外から見たコミ福なんですけど。うち、立教から実習生を毎年1名受けているんですね。他の大学とか専門学校とかからも受け入れるんですけど、コミ福から来る実習生の方はすごく毎回レベルが高くて、うちの職場の人がみんなびっくりするんですよ。特に実習ノートがすごくよくって。日本語が上手だとか、読みやすい文章を書くっていうのは結構難しいと思うので、それが割とあらかじめできているなっていうことをすごく感じているので。

長倉 よかった。卒業生に恥をかかせてはいけないので。

榎府 いや。だから、実習に来る方のレベルがすごく高いなと思って、いつも感心しています。

長倉 私どもの教育のたまものでございます。

榎府 はい。ありがとうございます。あとは、他の大学のことは正直あまり分からないんですけど、先生と学生が距離が割と近いのかなとは思っています。

松井 近いですね。

長倉 それはよく言われますね。在学生からも。

榎府 なんか、そこが見てて、いいなと思うので。だから、こういうイベントとかもすごい雰囲気がいいんだなと思うので。こういったのはまた引き続き、どんどん続けていただきたいなと思っています。

【ワークショップ報告】

卒業生ゲストからのお話を受け、グループ1では、まず最初に、個々人でコミュニティ福祉学部の「良い点」「課題」をポストイットに思いつくだけ書くという作業の後、それぞれが発表をした。その上で、同じグループにカテゴライズできる意見をまとめていき、全体で議論をし、まとめるという手順をとった。

その結果、「良い点」と「課題」は以下の点に集約された。

「良い点」

- ・全てにおいて自由である。
- ・落ち着いた、のんびりした雰囲気がある。
- ・また帰りたいと思えるアットホームなキャンパスである。
- ・様々なことが学べ、学びの幅が広い。
- ・色々な研究分野の先生方がいて、多くの分野が学べる。
- ・1つの分野を広い視点から学ぶことができる。
- ・今までになかった視点が得られる。
- ・語学の勉強が充実している。
- ・お互いを認め合う力が強い。
- ・他を受け入れ、相互のコミュニケーションがよくとれている。
- ・先生と生徒が気軽に話せる環境が整っている。

- ・卒業生が（学部や在学生と）つながれる場がある。
- ・縦のつながりが結構ある。
- ・真面目な学生が多い。

「悪い点」

- ・主張をあまりせず、前面に出ない。
- ・（学生が）消極的に見える。積極性に欠ける部分がある。
- ・変化を恐れる部分が見受けられる。
- ・自分のやりたいことを見つけるのが難しい。
- ・一人一人がリーダーシップをとるということが出来ていない。
- ・外から見たとき、何をやっている学部なのか分かりづらいし、説明しにくい。
- ・広報が地味なので、もっと派手に広報した方がよい。
- ・学科間の交流が少ない。

「まとめ」

コミュニティ福祉学部の良い点として挙げられたことを大きくまとめると、自由で落ち着いた雰囲気、アットホームなキャンパスであること、また、様々なことが学べたり、広い視野を持ったりできること、お互いを認め合い、教員、学部生、卒業生が繋がりをもっていることと言える。

逆に悪い点として挙げられたことをまとめると、学生が積極性に欠け、変化を恐れる面があるため、自ら主張したり全面に出るということがないという点、学生が自立して自分のやりたいことを見つけたり、リーダーシップをとったりということがない点、外から見たときに何をやっている学部なのか分かりづらいし説明しにくく、広報が地味に見えるので、もっと派手に広報した方がよいという意見があった。

これらを踏まえ、グループ内で出た解決策をまとめると、「迷っているのであれば、とにかくやってみる」「様々な文化や価値観を受け入れる姿勢」「他人と違っていてもそれを『変』だと捉えるのではなく、『ユニーク』だと捉える姿勢」ということになろう。

真面目な学生が多く、色々な分野の研究をしている教員や様々な分野で活躍している卒業生がいるので、学部生からも積極的に関わりを持ち、ひとり一人が持っている能力やスキルをもっと自分からアピールすると良いということである。

【参加者の声】

- ・小規模なワークショップは、プラスもマイナスも様々な意見を非常にオープンに語り合える良い機会だった。
- ・学生の新鮮な意見が聞けて、今のコミ福を知ることが出来て嬉しかった。今後も、“Change & Challenge” の精神で、皆で、コミ福の守るべきことは守り、変えていくべきことは変えていけたらよい。
- ・卒業生が昔なじみの仲間、先生にかつての学び舎で再会できる、後輩に助言でき、先生のコメントに懐かしさを感じる場にして欲しい。
- ・現役生が弱いということは全然ない。学生が活躍できるプチ成功体験がまなびあいの年次大会であって欲しい。
- ・学生、卒業生、教員が近い距離で、ざっくばらんに話が出来たこと、三者と一緒に議論できたことが良かった。
- ・ゼミ生達がプレゼンテーションをして自分の経験を多くの人の前で語ることで自信を付けていくのがとても嬉しかった。
- ・ワークショップを取り入れたのは良かった。今後も続けていくといいと思う。
- ・コミュニケーションがコミュニティを創っていると改めて思った。
- ・自分にはない視点を他学科の先輩方から得ることができるのが魅力の一つである。
- ・学生の発表機会はとても貴重なので、参加者が増えていけば嬉しい。
- ・予想と違って、非常に充実した一日になった。
- ・コミ福の事についてこんなにも様々な視点から考えたのは初めてだった。
- ・卒業生との交流はとても楽しかった。
- ・他学科の学生や教員の視点からコミ福のことを聞き、自分が知らなかったことを知ることが出来て良かった。
- ・学生達や先生方が感じている良い点と問題点が似ていたので、これらの意見がコミ福が良い方向になるために有効活用されるといい。



〈N226教室〉

【講師紹介】

加藤 祥太 氏（株式会社学研ココファン）

2016年、コミュニティ福祉学部福祉学科卒業。2016年、株式会社学研ココファン入社、岸谷公園事業所訪問介護部門へ配属。2017年、日吉事業所ショートステイ部門へ異動。2018年、株式会社学研ココファンスタッフ人財開発部へ異動。現在、学研ココファングループで、新卒学生の採用／インターンシップを担当。

高間 早葵 氏（新座市役所）

2014年、コミュニティ福祉学部福祉学科卒業。学生時代は高齢者施設、児童館等でのボランティア、障害児放課後デイサービスのアルバイトを経験。社会福祉士を取得。卒業後、社会福祉協議会へ入職。勤務するなかで、誰もが安心して暮らせる地域づくりを進めるためには行政機関の役割が大きいと感じ、新座市役所へ入庁。現在、生活支援課配属。生活保護ケースワーク業務を担当。

【司会】

斉藤 知洋（コミュニティ政策学科助教）

【講師の話】

加藤 改めまして、本日よろしくお願いたします。10分程度ということで、どんなことを話したらいいか、ほとんど分かってない状態で来たんですけれども。コミ福の学びがどのように生きているかということをお話していただきたいと思います。

まず仕事のことにについて簡単に自分の経歴とか、ちょっと紹介したいなというところと、学生の時代のときからの流れからお話していきたいと思います。私は2012年に入学をしました。東日本大震災の翌年の年に入学しまして、2016年卒業して、福祉学部で地域福祉領域を主に選んで学んでおりました。皆さんご存じないと思うんですけれども、森本先生っていう、地域福祉のすごい偉い方の元で学んでおりました。

地域福祉等々を学んでいく中で、特に高齢者の方が増加しているっていうところもあったりだとか。私自身が田舎出身でして、上京してきたときに、3世代同居とかで高齢者の方と関わっていく、おじいちゃんばあちゃんと関わっていくこと、地域の中で関わることがすごく自分の中で芯としてあって、それを基にこういうのを考えていきたいなというところから地域福祉を学んで、実習では社協とかに行っただすけれども。その流れからですかね。高齢者に関わる相談とか、

社会福祉士の勉強してきたことを生かしたいな、というところで、相談援助の仕事に携わりたいなと思っていたんですけども。やはり高齢者の方の相談援助やるにあたって、切っては切り離せない介護という問題がありますので。まずは自分で介護のことを経験してから、その流れで高齢者の方の相談というところに携わっていきなと思って、介護の仕事に就きました。

学研ココファンという会社で。ご存じないかもしれませんが。サービスつき高齢者向け住宅っていうものを運営している会社なんですけれども。そこで訪問介護の仕事ですとか。また部署を異動しまして、ショートステイなどの部門で勤務をしておりました。その後、社会人3年目のときに、同じ会社の新規学卒者の採用を担当する部署に移りまして、新卒採用とインターンシップの企画運営などを行って、現在、学生さんに関わるような仕事になっています。高齢者と関わりたいと思っていたのに、どんどん若い人と関わる仕事になって、何だかなあと思ってるんですけども。これもまた、将来的に相談事っていうところで、学生さんからの思いとかっていうところも聞く、この技術とかは将来的に高齢者の方に生きていくのかなとかは思うので、勉強と思うような仕事をしております。て感じでしょうか。仕事はこのくらい。

特に、コミ福の学びというところが仕事にどう生きているかっていうところなんですけれども。やはり、私自身、福祉の学びをしまして、福祉学科で本当にいろんな福祉、障害、高齢、子ども、地域、医療、いろんな福祉を学んできた中で、特に介護という仕事には、いろんな分野が関わっていくんですね。地域で、1人で暮らしている高齢者の方が、介護を必要になったときにどういうふうな状況で、どういうふうに関わっていかなければいけないかだとか、そこには医療の面も関わっていくだろうし。

また、高齢者の方の介護とはいっても、障害のある介護の方もいらっしゃるもするので、障害面での関わりというところもあったりだとか。これまで障害福祉の制度を使っていた方が、高齢、あの年齢が65歳になって、介護保険を使うってなったときに、切り替わったときにどういうふうに対応していくのかとか、というところで、これまでのコミ福での、特に福祉学科での学びというところが生きているのかな、というところは思っておりますし。また、この地域の資源とかっていうところに、いち早く気付けるっていうのは、福祉の学びがあったからこそなのかなっていうふうに思っています。

やはり何も学んできていない、福祉のことを学んでいなかった方も、私の同期だとか上司とかにたくさんいますけれども。その方々は、その高齢者の方が豊かな生活を送っていくために、どういうふうにしたらいいかというときに、周りの地域の資源に全然、詳しくなかったりだとか、気にならなかったりだとかして、必要な商品だとかサービスをつなげていくっていうだけに留まってしまったりも

しているの。

そこを地域の限りある資源、本当に、例えば市役所で何かやっているものとかを使ったりだとか。社協さんがやってるものとか、いろんなNPO団体さんのやってるものとかというところに、つなげていけるような考えを持てるのが、この福祉の学びがあったからこそかなっていうふうに思っております。こんな感じですかね。

齊藤 分かりました。ありがとうございました。それでは続いて高間さん、お願いいたします。

高間 なんか、すごいちゃんとした話の後に、私、すごい緊張しているんですけど。

今、新座市役所で生活保護のケースワーカーをやって5年目になります、高間といいます。キャリアとライフサイクルというところで、10分程度お話をさせていただければと思います。

私、自己紹介を兼ねてなんですけど。学生時代は本当にゆっくり起きて、世界一の弁当とか皆さん食べたことがありますか。世界一の弁当とかって、ユリの木ホールで食べるってあたりやって、すごい持ってて。なんです、出席カードすごいコレクションしているような、くだらない学生でした、本当に。私、このときに途中で「こかげ」ができたので、やたら「こかげ」に行くということをやっていたような、本当にくだらない学生で。で、本当にそのこと、特に何をやってたということが正直なくて。なんか私は、なので、福祉学科にこもるような生活をしていたので、何となく福祉の業界とか公務員とかそういうこと考えながら過ごしてました。

私は新卒で社会福祉協議会の方に就職して、サロンの立ち上げの手伝いとか、ボランティアとか。夏のボランティアの子ども集めてボランティアに行ってもらうとか、ということをやってました。その中で結構、全体広い面でコミュニティーとかってということには関わることすごい多かったんですけど、それよりも、もうちょっと一人一人に関わって、お仕事がしたいみたいな、というふうに考えるようになって、ケースワークというところにちょっと興味が湧きまして、市役所のほうに転職をした。で、生活保護のケースワーカーとして働いて5年目という感じになっています。

先ほど、本当にリアペ集めとかくだらない話をしたんですけど。私、学生るとき、ちょっと話戻るんですけど。本当に、どうしたらいいか分からなくて。人のまねをよくして。政策学科の子がインターンに行っていたので、私もちょっ

と行ってみるとか。ボランティアで、センプラルに入っていたんですけど。そこ、友達が行ってるからちょっと障害者の方と一緒にサッカーしてみるとか、そういうまねをしたり、取りあえず何かをやるっていうことは心掛けていたかなというふうに、今、考えると思っています。

勉強的には、なんかこう、こんな役立つのかなとか思いながらずっと聞いていて。うそくさいなと思いながら聞いてました。なので、そこで結構、学生時代得たっていうふうに思うのは、やっぱり友達だったり、先生のつながりだったり、そういったところが大きいかなっていうふうに今は思ってます。

実際に社会に出て、これ役立つからとかといって社会福祉士の勉強したりして、役に立つのかなと思っていたっていうのが正直な感想でした。1年目から4年目は、本当にそういう理論、なんかバイスティックがなんだとかっていう理論を、すごい学んできたっていうのは覚えてたし、分かってはいたなっていうふうに思うんですけど。実務で介護保険の制度とか、生活保護の実務の制度とか、そういったことは全く分からなくて。そこはもう勉強しなくちゃな、本当、無力だなと思って、どんどん自分の中に入れ込むっていう作業を一生懸命やっていたような気がします。

それで本当に必要なことなんですけど、じゃあそれで完璧かという、そうでもなくて。それを誰かに伝える。私だったらケースワーカーなので伝えて、その支援につなげていかなきゃいけないっていうところに、また次、つまずきまして。勉強しても生かせないんじゃない、どうすんの？っていうところで、すごく悩んだことがありました。

でも、今、その利用者の方と関わる中で、大学時代にその世界一の、私、言ってた、さっき話したんですけど。私、市役所で仕事してるので、「私も世界一のスーパー行ったことがあります」って言ったらおばちゃんと仲良くなれたりとか。私お米が好きなんですけど。お米がどこが安いとか、そういう話をしたりすると、結構、仲良くなれたりして。そういう、くだらないと言ったらあれなんですけれど。そういったところからでも結構、いろいろ引き出せたりするんだなっていう

ことがあります。で、そういうのって、お米の関係じゃないんですけど。実はそれが信頼の関係につながっていったりとか。後付けで、学べた理論が、そういうことなのかなっていうのが見えてきたっていうのが、4年目から5年目にかけて、そういったところが、今、見えてるかなっていうふうに思っています。

今、5年目になって、本当に私、今ま



でペーパーで、後輩でっていう楽な立場にいたんですけど。今、私、27なんですけれど、後輩の子たちがすごい増えてきて。1年目、2年目、3年目の子たちが増えてきて。私も教え、聞かれると私も思ってなかったんで、実務のこととかを。なので、すごいびっくりしたんですけど。ああ、もう先輩に見えてるんだなっていうのを、すごく最近感じてて。

私がすごく1年目、4年目に頑張ってインプットしたことを、利用者の方には還元していくつもりでやってたんですけど。その周りに、自分の関わってる人、友人であったり、関係者だったり、同僚であったり、そういうところにはあんまりアウトプットできてなかったなというのがすごく感じてて。仕事上だけじゃなくて、そういう人との関わりの中でアウトプットっていうことが、今すごく課題だなっていうふうに思ってます。アウトプットすることって結構いいことだなと思ってて。私は今これに興味ありますよ、とか、こういうこと知ってますっていうことを、知識の内容だけじゃなくて、そういう自分のスタンスを結構、伝える、ことができるなっていうふうに思っています。

ちょっと仕事と関係ないんですけど。私、Mr.Childrenがすごい好きで、それを言うようにしたら、町内の中から、「好きって聞いたんだけど」って言うてもらえたりとか。成年後見制度ってちょっと、分かる方、分からない方、いらっしゃると思うんですけど。その、そういうことにちょっと、仕事の中ですごく勉強しなきゃいけない場面があったので、そういうことは、ちょっと分かるようになったっていうのを、課の中で話をしたら、ちょっと考えてるんですよっていう後輩だったり、先輩だったりから話をもらったりするようになって。結構そういうのって今は大事なんじゃないかなっていうふうに思ってます。

結構、話が、わあって広がっちゃったんで、まとめます。今、私ずっと、やりたいこととか、やってみたいことに顔を突っ込んでやってきたっていうのがすごくあって。今でも私、今、市役所だけってのがすごい狭いなと思っていて。私、社会福祉士持っているので、県の社会福祉士会に行ってみたりだとか、こういう場に呼んでいただいたりとか、そういうことをしてたり。あと、今、きょう来てる、社会福祉士会で知り合った人がいるんですけど、たまたま大学の先輩だったりして。その方とお話をしたり、そこの方が集まってる場所にちょっと顔を出させてもらったり、そういうふうに、何かをやる、今やりたいことをやるということが、それが人生の繰り返しなんじゃないかな。ことなんじゃないかなと思ってて。

キャリアとかライフサイクルって、横文字にやるとすごい難しいし。私もちょっと訳分かんなくて、ウィキペディアで調べたんですけど。分かんない、と思って。でも、私なりには、今、やれることとか、やれる範囲の中で、繰り返す、やる、取りあえずチャレンジしてみるっていうことがキャリアにつながっていく。自分をつくっていくことにつながるんじゃないかなっていうふうに思っていま

す。で、やりたいことがないときもあるんです。私もあるし、結構やりたいこと
ないこと多いんですけど。そういうときは例えば、友達がどういうことやってる
のかなっていうことにアンテナ張ってみるとか、本読んでみるとか。映画でもい
いと思いますし、何でもいいので、アンテナをちょっと。ずっと張ってるとつら
いと思うので。たまには、周りの人が、自分が、じゃなくて、周りの人が何をやっ
ているかっていうことも大事にできたらいいなっていうふうに思って、27歳を生
きてます。以上です。

【ワークショップ報告】

本分科会では、本学部福祉学科卒業生の加藤祥太氏（2016年卒）と高間早葵氏
（2014年卒）をお迎えし、キャリア上の経験談を中心にご報告頂いたうえで、「コ
ミ福での学び」についてディスカッションを行った。本分科会には9名の在学生
と1名の卒業生が参加した。その半数は福祉学科に所属する4年生（5名）であ
り、社会福祉士などの福祉職の内定を得ていた。残り5名は、福祉学科生（3年
生1名、卒業生1名）コミュニティ政策学科生（3年生2名、4年生1名）であっ
た。

はじめに司会者（斉藤）より、分科会の趣旨説明をした。卒業生の方に特に
お願いしたのは、（1）学生生活やお仕事について率直にお話頂くこと、（2）福祉
に関わる仕事をしていく中でやりがいや辛いと感じていることを含めてご報告頂
くことであった。その理由は、大きく2つある。第1に、インターンシップや
OBOG訪問のようなフォーマルな場ではなく、本ワークショップではざっくばら
んに「本音」をご報告頂いた方が就職（活動）を控える3・4年生の参加者にとっ
ては有用であると考えたためである。第2に、学卒後のキャリア形成とライフ
コースについて考える機会を持って欲しかったことがある。周知のとおり、ケア
労働を担う人材の確保は、急速な高齢化を経験した日本社会において喫緊の政策
課題であるが、福祉・介護職の離職率は生活関連サービス業に次いで高水準にあ
る（厚生労働省「雇用動向調査」）。その背後には、福祉・介護労働が抱える困難
がキャリア継続を阻害しているものと考えられる。就職活動や実習だけでは見え
てこない福祉・介護職の全体像をお二人のご報告からイメージできるようにご配
慮頂いた。内定を獲得するという短期的な目標ではなく、働くことの意味を理解
し、後の人生の歩み方を深く考えてもらうことは司会者が学生に期待していた点
でもあった。

卒業生の報告は、1人あたり10分程度でなされた。現在の仕事内容に加えて、
当時の学生生活や所属ゼミ、就職活動などについてもお話頂いた。その後、在学
生から卒業生に対する質疑応答（例：大学生のうちに何をしておけば良いか、お
仕事をしていく中でコミ福で学んだことがどのようにいかされたか、福祉職では

どのような人材が求められているか)がなされた。卒業生からも在學生に対して質問がなされ(例:将来の仕事についてどのようなイメージを持っているか)、双方向のディスカッションが展開された(1時間程度)。

質疑応答後、「コミ福の強み」について付箋に記載し、それをポスターに貼り付けていった(15分)。記載内容をカテゴリ化すると、大きく(1)学生生活(ゼミ・授業・単位)、(2)就職活動(内定率・資格)、(3)人間関係(教員と学生・ゼミ生・先輩後輩)にまとめられた。付箋の中から、司会者が気になったものをピックアップし、投稿者に詳しく発表してもらった(15分)。

今回のワークショップは計2時間なされたが、もう少し時間を確保できれば良かったかもしれない。当初の予想以上にディスカッションが活発になされ、在學生から積極的に発言がなされたことも高く評価できた。ご参加頂いた卒業生のお二人も、社会人になられて4~5年目ということもあり、職業キャリア初期のご経験談は在學生のみならず、司会者自身も参考になる点が多かった。ワークショップ型の分科会は初めての試みであったが、卒業生と在學生が互いに「学び合える」場として本会は成功であったといえる。今後、同様のワークショップが実施されることを大いに期待したい。

【参加者の声】

- ・ワークショップの企画はとても良いなと感じました。就活が目的になってしまっ、せっかく就職したのに何か違うと思う場合も多くあると思えば、今回のように社会人の方から、また同じ学部(OBOG)の方からお話を聞いたり、考えを共有したりすることで、私自身はどのような人生を歩んでいきたいのか、という就職の先まで考えられるきっかけがあることで、より良いキャリアデザインが描けるのではないかと思います。(3年生コミュニティ政策学科・女性)
- ・学部の強み、弱みを考えたことはあまりない経験であったため、4年生にしてそういう学部がったんだと再認識できました。福祉の人はみな温かい人が多いという意見があったように、こうして仕事をし、お忙しい中時間を割いて頂き、とてもありがたいお話がたくさんあったと思います。」(福祉学科4年生・女性)
- ・ワークショップでは、一人ひとり発言する機会を同じように提供して頂いたおかげで、受け身になることなく取り組めたと思います。



また、ふせんを使って「見える化」したことで、一人ひとりが考えていることを共有しやすかったと感じます。(4年生福祉学科・女性)

- ・全体的にもう少しワークショップの時間が長くて良いのかなと思いました。時間が過ぎるのがあっという間でした。(4年生福祉学科・女性)
- ・今後もし(ワークショップを)やるなら、各学科がどんなことをやっているのかについて知りたいと思った。それらをふまえて、学部としてシナジーを生み出すような何かをつくる、というのも面白いと主合った。(4年生福祉学科・女性)



〈N227 教室〉

【講師紹介】

新谷 健介 氏 (株式会社星野リゾート)

2013年、コミュニティ福祉学研究科コミュニティ福祉学専攻博士課程前期課程修了。在学中は体育会ボート部に所属。学部生時代は、児童・女性福祉を専攻。大学院では、健康心理学を専攻。進学直前に、東日本大震災が発生したこともあり、コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援推進室の運営にも携わる。その後、新卒で星野リゾートに入社。現場で5年間働いた後、現在はグループ情報システムを担当。

小林 愛美 氏 (荒川区役所)

2010年、コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科卒業。コミュニティ政策学科1期生。卒業後、荒川区へ入庁。図書館司書として勤務した後、現在は障害者福祉の分野にて経理を担当。一児の母。

【司会】

三宅 雄大 (福祉学科助教)

【講師の話】

小林 あらためまして、小林と申します。この話をいただいたときにテーマが重いなど、思いました。学生時代で学んだことが、じゃあ今何に生かされているのかをちょっと半ば強制的に話さなければならないっていうのが、えーっていう。大学時代のノートを作ってたんですけど、それが何冊か残っていて、それを読み返してみたりだとか、こんなことを若い頃は考えていたんだなって、本当に10年前の話なので、すごい昔のこと過ぎてなかなか思い出せないっていうか、実感が湧かないっていう。先ほども控室で結構コミ福って直接学んだことを仕事になるかどうか、経営学部とか経済学部とかではないから、そういった何を生かしていけるかっていうのが、あんまり実感として湧きづらい学部みたいな話があったんですよ。

確かになとは思っていて、私の場合地方公務員として荒川区で働いてるんですけど、もともと図書館司書になりたくて自治体職員を目指してたんですね。一応最初の3年間は司書として働けまして、その後に障害者福祉課、障がいのある方を支援する課に配属をされて、特にケースワーカーではなく、制度とかそういったものを、作っていく裏方の事務、つまり経理として働いています。

実は3歳の息子がいまして、家庭でも、あと仕事でも家庭でもないプライベートの場で、全部一貫して、コミ福で学んだこと生かされてるなって思ったのが、気付く力を学生時代にすごい練習したなっていうのが、結構ありまして。例えば仕事で一つの問題が起こったとして、課題があるなっていったときに、組織の目標を、何ていうんですかね、課題って組織が解決していくものなんですけど、でもその課題を見つけるのって個人でしか気付かないんですよ。個人個人で自分の仕事をやってるときに、おかしいなとか、違和感があるな、お客さんと話してる時にそのニーズをキャッチできるのって個人でしかキャッチができなくて、それを問題として捉えられるかどうかっていうところなので、そういった気付きを、気付ける力を養っていくことをこの学部で何度も何度も練習してるのかなって思ってます。

コミ福では本当に多岐にわたる分野を勉強してると思うんですけど、答えの出ないものばかりやってると思うんですよ。なので、そういった答えが出ないからこそ、じゃあこういうふうな課題があって、じゃあどういうふうにしていったらいいのかっていうのをディスカッションしたり、実習に行ってみたり、現場と触れ合ったりする中でいつも自分はどうしていきたいのかっていうのを、常に自分に問うてるっていう、そんな大学時代を結構送ってたな。

気付ける力が3歳の子どもに対して生かされているんですが、子どもから学ぶことっていうのもすごくたくさんあるんですね。本当に、教えられてる、自分

が育っていくっていう感じで。子どもと話す中でも気付けるかどうかで大事で、気付かないとその子どもが何を求めているかっていうところまでは分からなかったりもするし、本当に小さなことにも気付かない。気付けるかどうかで本当大事だなって思ってます。

プライベートでも気づきが大事なんです。音楽が好きで、今、作曲とかをやっているんですが、作曲だったり、あと芸術作品に触れるときとかって、自分の心が動く、皆さんもそういう好きなものとかあると思うんですけど、心が動くっていうのってすごく大事で、一つの絵を見てどう感じるか、どう見えるか。例えば、デザイナーさんが作った作品を、そのデザイナーさんはこういう思いで作ったけれども、それをどう見るかっていうのって結構見てる人に委ねてるんですね。それをどう感じてるか。それを感じない人もいるけれど今まで学生時代に、じゃあどうやって感じていくかっていうところをずっと培ってきたので、そういう芸術に触れたときの気付きていうのは多くて、でも、そういうふうに感性がどんどん磨かれてるなっていうのは今すごく思ってるんですね。それが、結構コミ福時代で培われた財産じゃないですけど、精神的な話なんですけど、そこで得たものかなって思ってますね。すごい長くなっちゃった。あとは結構多様性を受容できるようになったかなって思ってます。今障がいのある方とも、結構お話することも多いんですけど、学部で本当にいろんな方のことを勉強すると思うんです。障がいがあるだけじゃなくて、高齢者、子ども、外国にルーツを持つ方だとか、そういうすごくいろんな、本当にいろんな人いるんだなって。もう自分の常識で考えられない世界が広がっていたという。そういうのが結構、学生のときに面食らっていたことがあって、なので公務員として働いてるときに本当にいろんな方がいらっしやるので、別にそれに対して違和感っていうか、壁みたいなものをあ

んまり感じない。そういう人がいるんだなってすぐに受け取れるような、それは結構感じましたね。

なので、その2点かなと。気付く力と、あとは多様性を受け取れる、受容できる。そこがコミ福で学んだ、大きく学んだことなのかなって、今は思ってますね。以上です。

新谷 お話しさせていただければと思います。あらためて経歴をお話すると、2007年にコミ福の福祉学科に入って、大学4年間は福祉学科だったので、児童福祉領域を湯澤直美先生の下で勉強していました。在学時、ふとしたきっかけがあって、大学院進学を決めて、大学院進学後はスポーツウエルネス学科の大石和

男先生のところで勉強をしていました。先ほど大学を2011年卒業と言ったんですけど、ちょうどそのとき東日本大震災がありまして、なので大学院に入る直前に東日本大震災が発生したということもあって、コミ福の復興支援室というところにリサーチアシスタントというかたちで所属させていただいていました。て、大学院時代は大石先生のところで勉強しながら、どちらかというと、その復興支援室での活動、学部生を被災地に連れて行って一緒に子どもの学習支援などとかをして帰ってくるっていうのを、大体、月に1回ぐらいのペースで繰り返しているような日常を送っていました。

星野リゾートに入ったきっかけは、その活動で、気仙沼に毎月行ってたんですけど、そこで拠点とさせていただいたのが旅館でして、その旅館の方々がすごい我々に良くしてくれて、こういうスペースをつくれるっていいなっていうところから、ですね。実はもともとサービス業を少し希望してた部分はあったんですけど、そこであらためてちょっとホテルとか旅館、面白そうっていうことから、就職活動で出会った星野リゾートを希望して、今星野リゾートで働いているっていう経緯があります。

仕事の内容としては本当に、今年の5月までは実際に現場の施設にいて、星野リゾートは、接客だったり、ハウスキーピング、（お部屋の掃除）とか、実際に調理場に入って調理とかもするんですけど、そういういろいろなマルチタスクをこなしていました。ずっと現場の施設で働いていたんですけど、今は情報システムという全く別分野のところにいて、本当に今まで勉強したこともないパソコンの初期セッティング、会社用のセッティングをしたり、PCのセキュリティーソフトを導入したりしています。また、新しく開業する施設にそのパソコンを持って行ってセキュリティーがちゃんと動くかとか、予約システムがちゃんと動くかっていうのを確認したり、新しいシステムを入れれば、より現場のが、オペレーションの円滑化や生産性が向上するんじゃないかみたいなのを探して、実際に導入したりといった、全く異分野の職業を同じ会社内なんですけどやらせていただいています。

大学のときに、私もすごい今回のテーマどうしようかなってすごい思ったんですけど…。

小林 悩みますよね。

新谷 まず大学院に進んだ経緯、先ほどちょっと濁したところがあって、なんで進んだかっていうところが、大石先生がやってる健康心理学って受けたことあり

ます？ まだ受けてない？

参加学生 スポーツ心理学なら受けました。

新谷 そのスポーツ心理学でも似たようなことを話してると思うんですけど、先ほど小林さんも多様性っていうお話ありましたが、その授業の中で大石先生が、人はそれぞれ色眼鏡をかけて生活しているっていう話があって、その色眼鏡越しに見ていることにその人は気付いていない。だから、そういう偏見だったりという本来持たなくていいものを持ってしまっている。だから、自分と相手は違うもので当たり前のはずなのに、なぜか同じものだと考えてしまったりっていう、結構人の本質というか、自分が今まで知らなかったような新しい視点をもらえて、同時にその授業を受けながら、自分ってすごい弱い人間だったんだなっていうことも気付くことがありまして、この人のところでもう少し勉強したいと思ったのが、大学院進学のかっけになってます。

なので、本当にその大石先生の健康心理学受けてなかったら、多分、学部生のまま卒業して、今は全く別のことをやってたと思うんですけど、そうはならなかった。そういう1個の授業の本当に一つのフレーズだったり、ちょっとしたことで自分の人生が変わったっていうことがあって。ただそれは私だけが経験することなのかなってちょっと考えたんですけど、決してそんなことないなっていうふうに、この今回の話するときに思っていて。何ていうんですかね、どこで学ぶかっていうより、自分がどう学ぶかっていうのがすごい大事だなって。学部生の頃はそこまでそんなそのことを真剣に考えてなかったんですけど、大人になるにつれて思っていて、子どもの頃から宿題を与えられ、やりっていう、基本的に与えられたものをただこなしていくっていうのを繰り返してきたと思うんですけど、それで確かに勉強できるようになってきたかもしれないんですけど、それって別に自分で考えてやってきたことでもないし、自分の自立のためにはなかったのかなあって考えると、ちょっと疑問に思うところがあって。そうじゃなくて、

本当に大学4年間ある中で、一つの授業、一つのコマでもいいからその中で自分が興味を持てるものを見つけられるように、何ていうんですかね。ただ情報を与えられるだけじゃなくて、本当に全く興味ないなって思う講義でも聴いてると、たまに本当に自分に全然関係なかったはずが、すごい興味があるっていうものに出会えたりするので、しっかりとア



ンテナを張っておくというか。ちょっと話がごっちゃごちゃになってるんですけど、アンテナを張っておいて、自分がいかに何でも受け入れられるようなスタンスを取っておくっていうのが、大学時代もっと自分がしておけばよかったなっていう後悔もあり、そういうことができる環境にコミ福はあるんじゃないかなっていう、私の思いでもあります。

実際コミュニティ福祉学部って、さっき小林さんも言っていましたけど、経済学部とか経営学部みたいに、一見直接仕事に役立たないって思われてる学部かなとも思うんですけど、逆に私はあんまりそう思ってなくて。逆にいうとコミ福は誰でも関わる、人間、生きてたら絶対年を取ってきて、そしたらそのときに絶対福祉っていう言葉にはぶつかるし、スポーツウエルネスでも自分の体が動かなくなってくるとか、絶対に今後の人生、生きていたら、福祉業界に就職しなくても絶対に自分に何かしら、それは自分に起こるかもしれないし、親に起こるかもしれないし、友達に起こるかもしれないしっていうときに、絶対に全く無関係の学問かっていわれると、そうじゃないと思うんですよ。

同時に経済学部とか経営学部が勉強していることって、確かにそのまま仕事に役に立つことかもしれないですけど、大抵就職してみると分かるんですけど、その企業はその企業のやり方があるので、結局その企業に就職したから身に付けるスキルのほうが圧倒的に多いんですよ。なので、スキルを身に付けたかったら自分でいくらでも勉強できるけど、コミ福に入ったからにはコミ福ならではの、自分の今後の人生に生きる勉強っていうのは、間違いなくアンテナを広げればできるっていうふうに思っていて。なので、結構コミ福、私は入ったとき第1志望じゃなかったみたいな子もいたんですけど、せっかくコミ福に入ったんなら、いつまでも第1志望じゃないからっていうモチベーションでいるよりは、何かしら毎日授業で一つずつでも何か気になることを見つけようっていう姿勢で勉強してたほうが、絶対、今後の人生に役に立つなっていうのは思ってるので、それを今日はちょっとでも伝えられたらなと思ってお話しできればと思っています。以上です。

【ワークショップ報告】

N227教室では、2名の卒業生ゲストスピーカー（小林愛美さん、新谷健介さん）と6名の参加者（在学生5名、学外参加者1名）で議論がなされた。

まず、それぞれのゲストスピーカーから、（1）自己紹介（大学時代、現在の職業について等）と、（2）コミュニ



ティ福祉学部での学びが現在の生活（私生活、職業等）にどう活かされているのかを語ってもらった。ここでは、コミュニティ福祉学部での学びが他学部（経営学部等）のように直接的に、あるいは、わかりやすく仕事に役立つものではないことが言及されていた。しかしながら同時に、コミュニティ福祉学部での学び（「気づく力」、「多様性の受容」、「アンテナを張ること」等）が、私生活や仕事において間接的に活かされていることが強調して語られていた。

その後、参加者全員で「コミュニティ福祉学部の強み／弱み」を題材に議論してもらった。参加者からは、多様な「強み」（優しい人・まじめな人が多い。答えがなく、自分で考える授業が多い。先生と学生の距離が近い等）が挙げられた一方で、「コミュニティ福祉（学部）とは何か」を他者に説明し難いことなど、在学している（在学していた）からこそ見える「弱み」も指摘されていた。

以上のような議論を通じて、参加者（卒業生を含め）は、「コミュニティ福祉学部の強み／弱み」をそれぞれに認識し、あるいは、捉え直すことができたようであった（具体的な感想は、次項参照）。

【参加者の声】

以下、紙幅に限りがあるため一部に限られるが、リアクションペーパーに書かれていた参加者の声を紹介する。

- ・「コミュニティ福祉学とは何だろう」。これは、4年間ずっと悩んでいたことでしたが、改めて今日ふり返ることができ、私の中のコミ福概念がアップデートできたように思えます。それを仕事、家族、そして、プライベートでも実践していきたいと思いました。
- ・自分が学生時代に学んできたことが、今の人生にとっても活かしているということを、今回のグループワークを通じて気づくことが出来ました。
- ・コミ福の強みとして挙げた「人の優しさ」は強みだけれど、社会に出たら違う環境になって弱みになってしまうこともあるという話があった。しかし、それに自信を失わず、自分の相手を尊重しようとする気持ちを大事にして欲しいという卒業生のお言葉が印象に残った。
- ・将来福祉職に就かな

かったとしても、コミ福での学び（ex. 気づく力、多様性の受容）は役に立つのだということを確信でき、自分の学びに誇りを持って、今後も勉強していきたいと思う。

- ・卒業生の方は、コミュニティ福祉に直接関わる仕事に就いていなくても、大学時代につちかった「アンテナをはっておく力」や「多様性を受けいれる力」、「気づく力」を使って、精力的に活躍されていることを知りました。

3) むすび

まなびあいには、在学生、卒業生、教員が相互に学び合う場ですが、その学びの対象は何でしょうか。個人的には「授業では、あるいは一人では学ぶことができないこと」であると思っていますが、今回のワークショップのテーマはまさに、まなびあいに相応しいものであったと感じています。「コミ福での学びが卒業後の人生でどう生かされるのか」は、授業や学内で「勉強」することではないし、「私のキャリアとライフサイクル」ならいざ知らず、それが「私たちの…」である以上、卒業生でも一人だけで考えることができないからです。

卒業生講師にペアになって頂き、4教室で行われたワークショップでしたが、各教室で興味深い意見交換ができました。どの教室もアットホームな雰囲気に包まれていましたが、コミ福の強みだけでなく、弱みについても多くの意見が出されたことが、ある意味で頼もしかったです。他所のそれではなく、当事者である自分が所属するグループの特徴を考えることは意外と難しいからです。このような意味で、卒業生講師の小林愛美氏が、コミ福で学んだこととして、「気づく力」を挙げていたことは象徴的でした。お互いを「気遣い」つつ、コミ福での学びの特徴を「気づき合う」ことが、まさに今回のワークショップでできていたからです。私はその光景を見ながら、「これがコミュニティとか福祉の原点なのかもしれない」と思いました。

冒頭で木下先生が述べているように、企画・準備段階ではワークショップを行うことに不安があったのも事実です。ですが、多くの卒業生に講師をご快諾頂き、また多くの学生が参加を表明してくれました。ワークショップということもあり、申し込みをした学生を事前に割り振っていましたが、開始直前に「飛び入り参加」する学生も来てくれたために、私たち運営サイドが少しバタバタしてご迷惑をおかけしてしまった面もありました。ですが、さすがにコミ福、ワークショップが開始するとコミュニティの輪が広がっていき、大いに盛り上がったので、その様子を見てホッと胸を撫で下ろしました。それと同時に、「来年もこのようなワークショップができれば面白いかもしれない…」と考えていた自分がいたことを思い出しました。そして実際に、2020年度の年次大会でも、卒業生講師をお呼びして

ワークショップを行うことが企画されています。

最後に、大変ご多忙の中、講師として参加して頂いた卒業生——大木彩氏、榎府憲太氏、松井あや氏、加藤祥太氏、高間早葵氏、新谷健介氏、小林愛美氏、坂田拓朗氏（まなびあい運営委員）——に心から御礼申し上げます。有難うございました！そして皆様、今後も、在学生、卒業生、教員で「まなび・気付きあい」ながら、コミ福の未来を「築いて」いきたいと思います。よろしくお願い致します！

（事務局長：権 安理）